

やはり俺が加賀さんなのはまちがっている。

いろはす@

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつものように艦これをプレイしていた比企谷八幡は、加賀さんに転生してしまつた・・・あ艦これ・・・ヲワタ。はたして彼は、激戦を潜り抜けて海域を解放し、無事帰還することができるのだろうか・・・（無理ゲー）

目次

第1話：八幡、加賀さんになる	1
第2話：沖ノ島前進鎮守府	11
最終話：やはり俺がゆきのん提督なのも まちがっている。	28

第1話：八幡、加賀さんになる

「……さん……かがさん……！」

ん？ここは……

思わず辺りを見回す。あれ？確か俺は艦これの期間限定イベント作戦を攻略中だったはずなんだが。目の前には、心配そうにこちらを窺うサラサラヘアの美少女……つてかルミルミ？何してんだお前？

彼女の容姿は明らかに知り合いの小学生、鶴見留美のものだった。しかし、どうもおかしな既視感がある。サロペットスカートタイプの制服に赤いリボン。そして黒のニーハイソックスから覗く絶対領域……

あ、朝潮たん!?

いきなりの艦娘登場に驚いた俺だったが、口をついて出たのは何故か、凜とした女子の声だった。

「ルミ潮さん、貴女ここで何をしているのかしら」

え？女子？つてか、いま喋ったの俺？それにしてはなんか聞き覚えが・・・

青い空、白い雲、広い海。そして長10cm高角砲を手にしたルミ潮の不安げな眼差し。あかんこれ、艦これの世界だわ。

「あ、あの、どうして私の本名を？」

ルミ潮が大きな瞳をさらに見開く。しまった！つい・・・こういう時は、サラリと流すに限る。

「驚かせてごめんさい。なんとなく、外見からそんな感じがしたの。気に障ったなら謝るわ」

「い、いえ、そんな！私こそ申し訳ありません！」

「有り難う。ところで、改めて状況を説明して貰えるかしら」

ボツチの俺を置いてけぼりにして、なんか女子だけで自然に会話が成立しているんですけど、この声、まさか一航戦の青い方とか言わないよね？

内心かなり動揺している俺へ、律儀に説明を開始するルミ潮。

「はい！現在、横須賀鎮守府から加賀さんの新たな任地へ向けて、巡航速度18ノットで航行中！現地到着まであと2時間の予定です！」

やっぱゲーム通りの生真面目な性格なのか、彼女は不信感を表すこともなく現状を報告してくれた。

「分かったわ。つまり貴女は私の直衛艦なのね」

頷くルミ潮を見ながら、状況を整理する。ここは艦これの世界で俺は加賀さん（仮）。典型的な中2病の痛すぎる展開だ。もうちよつとましな設定なかつたのか？ だいたい、中身が俺なら艦娘じゃなくて艦息だろ。

そこまで考えてはたと気付く。ま、まさかな・・・恐る恐る自分の身体を弄ってみる。特徴的なサイドテールにスラリと伸びた手足。黒い胸当ての下には、確かな胸部装甲の存在が感じられる。そして青い短袴の中は・・・モゾモゾ

な、なん・・・だと?! 驚愕 (@|@:)

(以下、自主規制中)

うむ、なるほど！俺はいま、真正正銘の艦娘さんなんですわ分かります・・・要するに、加賀さんの身体を弄ってみたいだけの転生だった。(変態認定)

つてか、艦これを原作にした記憶持ち男子の異世界転生モノつて、たいてい提督に転生するのが定番なんじゃないのか？加賀八幡つて、誰得よ？しかしまあ、ずいぶん御利益がありそうな名前だな。

「あ、あのう・・・加賀、さん？」

し、しまった！全部声に出てたらしい。ルミ潮が物問いたげに見詰めてくる。

「何でもないわ。先を急ぎましょう」

この身体にも、喋り方にも違和感ありまくりだが、取り敢えず問題を先送りする。相変わらず成長してないわ、俺。(泣)

そう言えば、目的地を聞いてなかったな。

「ところで、行き先はどこなのかしら」

いちいち、加賀さん言葉？に変換されるのがまどろっこしいが、仕方あるまい。だつて加賀さんなんでもん！（キモツ）

「はい！行き先は沖ノ島前進鎮守府。開設間もない、新進気鋭の最前線基地だそうです」
・・・はあ、ものは言いようだな。要するに、出来立てホヤホヤの捨て石拠点つてところか。てか横須賀からそんな僻地に転属つて、絶対訳ありだろ。なんかやらかしたのか、俺。

「えーそ、そうなんですか?!」

いかん、また声に出てたみたいだ。

「気にしないでちょうだい。それより対潜警戒をお願いね」

「あ、はい！お任せ下さい！」

朝潮と言えば、対潜特化タイプの改二丁が最終形態のはずだが、ルミ潮はまだそこまでの練度には達していないようだった。て言うか、どうやら俺は初見で他人の練度を把握出来るらしい。ドラゴンボールのスカウターかよ。

しかし、単艦で横須賀鎮守府から放り出された、チート持ちの加賀さん。どう足掻いても、面倒な未来しか見えねえ・・・

澄み切った青空の下、正規空母加賀さんこと、俺比企谷八幡は、小さなため息をつくのだった。

* * * * *

突然の艦娘転生。名もなくありふれた艦これファンとしての日常が終わり、俺は旅立っていた。地獄鎮守府へ向かって。

・・・とか言ってる場合じゃない。まずは情報収集だ。そう考えてルミ潮に質問を重ねようとした時・・・

「対水上電探に感あり！せ、戦艦ル級です！随伴の水雷戦隊も確認！」

え？マジ？この辺りって味方の制空権下じゃなかったの？思わず加賀さんらしからぬ挙動不審に陥りかけた俺は、瞬時に初歩的なミスを自覚した。空母が哨戒機も出さずに真つ昼間からお散歩とは、沈めてくれと言ってるようなものだ・・・

「ど、どうしましょう？私、輸送装備しか持ってません・・・」

慌てるルミ潮。やがて水平線の向こうから、ゲームで見慣れた深海棲艦が現れた。でも、これは現実だ。当たれば痛いどころの騒ぎじゃない。アウトレンジが基本の空母が懐に飛び込まれた時点で半ばアウトだが、転生初日に轟沈は嫌なので攻撃力に極振りしたいと思います。

「大丈夫よ、直ぐに終わるわ」

何やらフラグめいたセリフを吐きながら、素早く背中の中の矢筒を探る。ここでまさかの空っぽでした、とか言うオチじゃないよね・・・？つてか流星改二（一航戦）熟練度MAX?! 激レア最高級艦載機じゃんかよ?!

ハイレベルな装備に驚きつつも、手際良く矢を番える。我ながら、練度の高さを感じさせる無駄のない動きだ。そう言えば、俺のLvつていまどのくらいなんだろう・・・？

「一航戦加賀、攻撃隊発艦！」

お手本のような美しい姿勢で艦載機を放つ。蒼空に舞う濃緑色の機体。

「第1、第2小隊は左右からル級を挟撃！第3小隊は20ミ機銃で随伴艦の対空火器を制圧しなさい！」

「す、すごい……」

啞然として立ち尽くすルミ潮。やはりSSホロ艦攻の威力は伊達ではなく、戦闘は一瞬で終わった。あとはあの台詞が有ればいい。ゲームじゃ散々聞き慣れたひと言だが、まさか自分で口にする日が来るとはさすがに気分が高揚します。

「鎧袖一触ね」

結局、これが言いたいだけの転生だった、らしい。

第2話：沖ノ島前進鎮守府

沖ノ島前進鎮守府は、予想通りの急造基地だった。出迎えは定番の大淀、ではなく、吹雪と夕立のふたり。しかも制服からして、まだ改二にすらなっていない。こりや相当無理ゲーっぽい？

「か、回航お疲れ様です！ 特型駆逐艦一番艦、吹雪です！」

「お疲れっぽい？」

「加賀よ。司令官に会わせてもらえるかしら」

うわ、何か塩対応！ 八幡泣いちゃいそう。喋ってるの俺だけど。

さて、いざ提督とご対面。頼むからブラック鎮守府だけはやめて！ セクハラオヤジとかだったら、速攻で爆撃するまである。ああ、それは瑞鶴の専売特許だったな。てか、そ

もそも瑞鶴まだ居ないだろ。途中ですれ違った子たちも、みんなコモン艦ばっかだったし。

「失礼します、提督！加賀さんをお連れしました！」

「ご苦労さま。入って頂戴」

執務室の中から答える提督さん。ん？この声、まさかはやみん？

入室した俺の視線の先には、どえらい美少女がいた。長い黒髪が純白の第二種軍装に良く映える。思わず、海軍式の敬礼をしながら見惚れてしまった。外見が加賀さんじゃなかったら確実に通報案件だ。

「萌え〜!!」

「え?!」

い、いかん！つい声に・・・

「コホン！失礼致しました。攻撃隊発艦時の発声練習です。常在戦場ですので」

こういう時は、加賀さんが凜としたキャラで助かるぜ。適当言つときゃ取り敢えず何とかなるからな。ふう。

「そ、そうなの・・・？流石は歴戦の改二娘と言うわけね」

若干引きながら、言葉を継ぐ姫提督さん。あれ？て言うかお嬢さん、いまさらだけど貴女まさか？

「私の顔に、何かついていて？」

俺の視線に気付いたのか、小首を傾げる仕草もまた絵になる。てかその台詞、加賀さんの十八番でしょ？

「いえ、何も」

素っ気ない加賀さん。

「そう・・・じゃあ、改めて自己紹介するわね。はじめまして。沖ノ島前進鎮守府を預かる海軍少佐、雪ノ下雪乃よ。歓迎するわ、正規空母加賀さん」

横須賀から飛ばされた加賀さん^俺を待っていたのは、提督さん^{ゆき}だった。まじですか。

「うちはまだ新設拠点だから、まずはここの雰囲気や運営方針に慣れて。貴女の経歴な

ら、実戦に関しては問題ないと思うけど・・・」

ゆきのん提督が話し始める。いや、そもそもその経歴とやらが自分でも不明なんですが。

「貴女が連れて来てくれた航空隊を見せて貰ったわ。さすが熟練妖精さん揃いなものね。此処ではまだ、開発でも報酬でも入手出来ないものばかりよ」

「みんな、優秀な子たちですから」

クールな加賀さん。

「特に対潜回転翼機なんかは気になるわ。飛行甲板や格納庫を見てもいい？」

「！・・・飛行甲板はその・・・デリケートだから、あまり触らないで頂けますか」

あっけなく崩れる加賀さん。しかし、この後の百合展開に固唾を飲む俺を置き去り

に、話は進む。べ、別に残念なんかじゃないからね？

「堅い話はここまでにしましょう。横須賀からの長旅で疲れたでしょ？冷たい飲み物があるのだけれど、何がいいかしら」

そう言うと、雪ノ下は背後の小型冷蔵庫を開けた。随分と人当たりが良いことで。正直、らしくなくて違和感が仕事をしているが、コミユ力抜群のゆきのんとは新鮮過ぎてまたまた萌え〜！っと、危ない危ない、また叫ぶとこだったわ。

「いえ、どうかお構いなく。私たちは提督の兵器ですので」

ここで加賀さんの衝撃発言。どうやら本気らしい。いや、ダメでしょそれ。俺が言ったんじゃないからな。案の定、雪ノ下の表情に翳が差す。

「ひとつだけ言っておくわ。私は貴女たち艦娘を兵器だなんて思っていない」

綺麗な瞳で真っ直ぐ見詰められ、僅かに顔の火照りを感じる。あらやだ、ゆきのん美

人だし、もう沖ノ島改め百合鎮守府でいいんじゃないやね？通称ゆりちん。拂ります。

「ゆ、ゆきのんって、貴女まさか？」

しまった！また心の声がだだ漏れ。

「申し訳ありません。提督のお姿を見て、ふとそんなお名前が浮かびましたもので。お気に障ったようでしたら、お詫び致します」

テンプレの謝罪を口にする加賀さん。

「い、いえ、いいのよ、有り難う。その名前で呼ばれると、何だか懐かしいわ」

なぜか感謝された。解せぬ。

「で、改めて何がいかしら？フレンチシヨコラドウフラペチーノとミラノロマネスクラテ、それにクラシカルイタリアンオレもあるわ」

って何それ美味しいの？だいたいどんな飲み物なのか見当もつかん。女子って何で長つたらしい名前のドリンクが好きなのかしらん？

話題を戻した雪ノ下に合わせ、何気なく冷蔵庫へ視線を投げると・・・な、何だと?!
「MAXコーヒーを」

あくまでも、冷静な加賀さん口調でオーダーする。まさかマツカンを常備していると。やりますねえ、ゆきのん提督！

「か、加賀さん、それ激甘なんですけど・・・」

「こ、これを選んだの、貴女が初めてよ・・・」

なんでか狼狽える吹雪とゆきのん。失礼な奴らだ。そもそも、そんなにデイスるくらいなら置くなよ！

結局、加賀さんになってもマツカンを飲みたいだけの転生だった。

* * * * *

「ところで提督、海域攻略はどこまで進んでいるのでしょうか」

マツカンを呷りながら切り出す。もちろん今の俺は加賀さんなので、実際にはハンカチで包んだ缶を両手で捧げ持ちながら、少しずつ上品に飲んでいるのだが。

「現在、鋭意艦隊を育成しつつ、カムラン半島海域の攻略を進めている最中よ」

答える雪ノ下が手にしているのは、ナントカペチーノだ。ってかそれ、普通のコーヒー牛乳じゃね？ ツツコミを入れながら、マツカンの暴力的なまでの甘さを楽しんでいた俺は、頭をフル回転させてゲーム知識を思い出す。おいおい、カムラン半島ってまだ

序盤戦じゃねえか。ってことは加賀さんなんて運用できる訳ないだろ？微かな違和感を覚えつつ、分かりきった質問を投げかける。

「提督、失礼ですが私を養う余裕はお有りなのでしょうか」

専業主夫希望として、ここは譲れません！あ、加賀さんだから専業主婦か。施しを受ける積もりは無いが、養ってもらおう気は満々。

「んくっ！さすが痛いところを突いてくるわね・・・」

言葉に詰まるゆきのんが、何となくエロい。ゲフンゲフン！

「正直、今の備蓄量だと貴女に存分に働いてもらうのは難しいわ。特にボーキサイトが・・・」

まあ、新米少佐の時点でそんなものだろう。むしろここまで攻略出来ることが凄えよ。と、つらつら考えていた俺は、ようやく違和感の正体に気付いた。カムラン半島

だって？ 貴女いま何と？ まさかまだ第1期なの?! いや待てよ。これはむしろチャンスなのでは・・・試してみる価値はある。

「提督、出撃の許可を頂きたいのですが」

「そんなに焦らないで。まずはひと休みするべきだわ」

「いいえ、ご心配には及びません。それよりも確かめたいことがあるのです」

俺の口調に何かを感じたのか、雪ノ下の表情が変わる。やはりコイツは優秀だ。

「どこの海域に出たいの？」

「カムラン半島です」

「な?! それは無謀だわ！ 半月前から毎日艦隊を送っているのだけれど、大破撤退か羅針盤の異常で、ボスマスに辿り着くことすら出来ていないのよ」

「問題ありません。私を編成に入れて下されば、必ずや暁の水平線に勝利を！」

あそこは確か、空母系を混ぜると羅針盤が安定するんだっただよな。ボス固定条件を知っている俺は、この世界線ではとんでもないチート持ちだ。ふっ！もらったあ！（アズレン瑞鶴）

「待って！自信と慢心は紙一重よ。貴女がうちで最高練度なのは認めるけど、今は無理だわ……」

雪ノ下はきつと、充分な下調べをしてしつかり準備するタイプなのだろう。だが、これはゲームじゃないのだ。相手は待ってくれやしない。

「では、いつまで先送りするお積もりですか」

「くっ！」

過去の自分を棚に上げて雪ノ下を論破しにかかる。先手必勝。空母加賀、押して参ります！あ、台詞まちがえた・・・

* * * * *

そこからは破竹の快進撃だった。なんせ、予め答えを知ってる後出しジャンケンだからな。何なら俺自身が攻略サイトなまでである。ふっ・・・真面目にプレイしていた甲斐があつたぜ。

「提督、補給艦狩りはバシー海峡で行いましょう」

「わ、分かったわ」

「提督、今後はオリヨクルで備蓄を増やすべきかと」

「おりよくる？何のことかしら」

「東部オリヨール海の敵艦隊は対潜能力が劣っていますので、潜水艦娘による資源回収が可能です。これをオリヨールクルージング、略してオリヨクルと呼んでいます」

「これは備蓄が捗るわね」

「提督、沖ノ島海域のルート固定にはドラム缶を活用すべきです」

「あなたの言う通りだったわ。ストレートで海域突破成功よ」

そして全海域制覇も見えてきたある日、ゆきのん提督が俺の私室に飛び込んで来たのである。

「た、大変よ！加賀さん！」

「あら提督、どうしたのかしら」

「全ての海域がその……り、リセットされているわ！」

「……頭にきました」

てか、今日から第2期だったのね。(ノ、ノ、)

やはり俺の海域攻略はまちがっていた。

* * * * *

「……まん……はちまん！」

名前を呼ばれて目覚める。いかん、寝落ちしてたわ。なんか夢の中で加賀さん化したけど、またも黒歴史更新かよ・・・

顔を上げるとそこに居たのはルミ潮、じゃなかった、知り合いの小学生、鶴見留美。

「あらルミ潮さん、貴女ここで何をしているのかしら」

ちよつと艶のある落ち着いた声で応える俺。つて俺?!この声と口調、まんま加賀さんじゃん!まだ夢の中なの?いきなり喋りだけ加賀さんになった俺に、固まるルミルミ。そりやそうだわな。まあ待て、話せばわかる。

しかし彼女の背後には、何やら痛々しいモノを見るような表情で佇む一色と雪ノ下の姿が。あ、これオワタ。

「はちまん、なんかキモい・・・」

「さすがにこれはもうアレ過ぎて、ごめんさいも言えないんですけど」

「はあ・・・留美さん、この男を反面教師にするのよ？どうやら美少女だらけの環境に耐えきれず、ついに・・・でもまさかそっちに逝ってしまうなんて、やはり期待した私が間違っていたようね、変態君」

待て待て！そっちってどっちよ？てか違うし！それにもはや名前を振る手間すら省かれてね？

そして雪ノ下たちから罵倒されつつ、俺は思うのだった。やはり俺の青春艦隊ラブコメはまちがっている、と。

最終話・やはり俺がゆきのん提督なのもまちがっている。

「こちらです、提督」

運転手を務める艦娘の言葉で、我に返る。手元の資料から目線を上げると、窓の外には煉瓦造りの建物が広がっていた。どうやら目的地に着いたらしい。

「ありがとう」

澄んだ声で応えてからドアを開け、『俺』はスカートの裾を捌きながら車を降りた。潮風に靡く長い黒髪を押さえつつ、改めて目の前にそびえ立つ建物を見上げる。

「ここが横須賀鎮守府なのね・・・」

と、正門脇に佇む眼鏡を掛けた艦娘。早速の連合艦隊旗艦による出迎えイベントだ。伏し目がちで表情にも翳があるようだが、この状況下では致し方あるまい。妙な既視感

を覚えるのは、やはり艦これのやり過ぎか。先ずは彼女を攻略して味方に付けるのだ。

「お待ちしておりました。私は筆頭秘書か・・・」

「宜しくねっ！大淀さん！」

「は？・・・はい・・・」

し、しまった！第一印象が肝心なのに、つい興奮して先走っちゃった！相手に被せて喋るなんて感じ悪過ぎだろ。こういう時、女子へのフォローは迅速かつ丁寧に、がモツトー。ソースは小町だから間違いないはず。たぶん、M a y b e .

「遮ってしまつてごめんなさい。これからの日々を思うとさすがに気分が高揚し・・・じゃなくつて、とにかく貴女の優秀さは常々聞き及んでいるわ」

「!？」

華が咲いたような笑顔が浮かべ、砕けた口調でさり気なくフレンドリーさをアピールする。焦って少し加賀さんが混じってしまったが、取り敢えず怒ってはいないよな、大淀さん？

何やら顔を赤らめ俯いてしまった彼女を見詰めていると、

「も、申し訳ありません！どうぞこちらへ・・・」

ハツとしたように再起動して歩き出す大淀。明らかに挙動不審だが、俺と違ってどこか可愛らしく映るのはなぜ？

「気にしないで。案内お願いするわね」

気さくに応じながら、俺たちは鎮守府の門を潜ったのだった。



．．．さて、ここまで話が進んでも、どうやら誰もツツコミを入れてくれないようだから、敢えて自分で言おう。

どうしてこうなった？

気付けば俺は転生していた。やっと加賀さん転生（夢オチ）から帰還したと思ったら、またである。しかも今度の落ち着き先は、よりにもよって我が奉仕部部长、雪ノ下雪乃。なんで俺の転生先は、こうも面倒くさいヤツばかりなんだろう？ 甲作戦一択の無理ゲーじゃないですか。泣ける。

「ん．．．」

意識が覚醒した時、俺は部室でひとり、本を読んでいた。傍らには、静かに湯気を立てる紅茶ポット。ほう、これが俗に言う八×雪ルートか．．．（事実誤認）

「邪魔するぞ」

「先生、入る時はノックを」

俺、ゆきのんになります。祝！深夜アニメ化決定。ってかだからちよつと待って！そんなの絶対無理！だってコイツ、友達居ないし読書好きだし成績良いしいつも昼飯ひとりで食べてるし．．．

あれ、俺と結構似てね？まさか転生先として最適だったとか？しかし黒髪美少女になれるのはいいとして、これまで積み上げてきた我が提督業スキルはどうなるのです？

だがしかし、入って来た平塚先生の頭上に漂うものを見て、思わず俺は我を忘れて叫んでいた。もちろん、実際に叫んだのは雪ノ下だった。

「あら、こんなところに妖精さんが?!」

どうやら、こちらの世界線でも深海棲艦との戦いは続いているようだ。つまり、俺の艦これ知識を活かせる余地があるってこと。何たるご都合主義。

そして不用意な一言は、巨大なブーメランとなって跳ね返ってきた。

「なっ?!き、君は妖精が見えるのかねっ?!」

「あんっ!」

いてててていつ！何すんのよこの暴力教師?!

鬼気迫る様子で喰い付いて来た独身顧問に華奢な肩を掴まれ、思わずエツチな悲鳴が漏れる。雪×平キマシタワ〜!とかつて誰得よ? いや、実はかなり潜在的需要はありそうだし、むしろお願いしたいまでである。ゲホゲホ!

「す、濟まない雪ノ下。つい自分を抑えきれず・・・その、い、痛かったか」

「え、ええ、少し・・・」

動揺を隠せないイケメン女教師と、自らの肩を抱いて蹲る可憐な女生徒。何このエロゲー。ここ学校だよな? いま俺は何を見せられているのです?

因みに後で分かったことだが、提督適性を輩出した部の顧問には、大本営から法外な特別手当が支給されるそう。まあ、そうなるな。ん? じゃ俺の時も・・・いやあ、笑いが止まりませんな平塚先生。嫁入り準備資金ばかりが増えて肝心のお相手は・・・グ

シャ！（トリプルゲージ破壊）

で、あとは優秀な雪ノ下のことだ。あっさりと話が進み、晴れて最寄りの横須賀鎮守府に着任と相成ったのである。しかもここは、前任が問題を起こした所謂ブラック鎮守府。所属する艦娘たちは心身に深い傷を負い、士気は最悪な状態らしい。

はっ！これはもしかして、超定番のブラ鎮立て直しストーリー待ったなし?!（歓喜）人間不信に陥った彼女たちを鮮やかな手腕で救い、その信頼を勝ち得てついでに制海権奪還とか、胸が熱いな！

これまで山ほど読んできた艦これ二次小説を地で行く展開に、思わず拳を握ったまでは良かったのだが・・・

「慎ましいな……」

何が、とは敢えて言わないが、完璧美少女唯一の弱点を確かめつつ、思わず俺は眩いた。憧れとは手が届かないからこそ憧れなのであり、一度手にしてしまえばそれはただの現実となる。美少女転生モノは中二病患者の夢だと信じていたが、あれはうそだ。材木座が書くライトノベルの方が、まだまだしなまである。(暴論)

そう、たとえばあのゆきのんとて、お風呂もトイレも着替えも必要なのだ。お風呂もトイレも着替えも。大事なことから2回言ったぜ。要するにだ、お肌や髪の毛のお手入れから着衣の選定まで、諸々女の子としてどうすんの俺？というわけなのである。

まあ、止まない雨はないし、消えない違和感もない。そしてやはり、ないものはない……(真実)



「そしてこちらが出撃カタパルトになります」

「素晴らしいわ。アニメ版と同じ造りなのね♪」

「は?..」

「な、何でもないわ。次に行きましょう」

長々と回想に浸っていた俺は、思わず素で返事をしてしまい、慌ててキャラを取り繕った。ふう、ゆきのんやるのもひと苦労だぜ。

俺はいま、大淀の案内で基地内の各施設を巡っている。ブラック鎮守府再建のためには、鉄則の行動パターンだろう。途中で主要メンバーの艦娘に遭えたらなお宜し。さっきの大淀みたいに初対面で彼女たちの心を掴み、味方へ引き込むのだ。

え？ポツチの専業主夫志望にそんな芸当は無理だろうって？いやいや、これまでどれだけブラ鎮ジャンルを読破して来たと思ってる？二次小説好きは伊達じゃないぜ。どんな状況にも、高度の柔軟性を維持しつつ、臨機応変に対処するまでだ。（E敗北確定）

それに、いくら働きたくない俺でも、艦娘が関わるなら話は別。ましてや今の俺はゆきのん（外見のみ）なのだ。怠惰な雪ノ下雪乃なんて、ぼいぼい言わない夕立みたいなものだろ。何なら二十四時間働けるまでである。限定イベントではいつも徹夜だったし。あ、でもそれじゃ結局ブラックのままじゃん・・・

やっぱ泣ける。

道中では、敵意のこもった視線を向けてくる子や、遠巻きに暗い目で見つめる子、更には即座に逃げ出す子など、前任者の所業が垣間見えるシーンの連続だった。これは立

て直し甲斐のある惨状だな。ボス艦は誰だ？

食堂では覇気のない艦娘たちが黙々と経口燃料を摂る傍らで、間宮さんや伊良湖ちゃんには怯えた表情で立ち尽くし、工廠では明石と相棒の夕張が、満身に装備開発すら許されない現状に絶望の眼差しを浮かべている。

あ艦これ、まさしく絵に描いたようなブラック鎮守府だわ、ここ。それにしてもいつも思うのだが、よくこれで戦線維持出来てるわな。普通ならとつくに人類D敗北だろ。

と、不意に行く手を阻む艦娘がひとり。

「てめえが新しい提督か？」

いきなり殺気に満ちた目で睨み付けてくる隻眼娘。キタコレ！ブラック鎮守府モノでは定番だよな。露骨に突つかかってくるコイツを陥とせれば、後々の展開が楽になること間違い無し。所謂装甲破碎ギミックですね。（違う）

「天龍さん！止めなさい！」

「いいのよ、構わないわ」

諫めようとする大淀を制し、俺は前に出た。この場の対応如何で今後の提督ライフが決まるのだ。さあ、行くわよ瑞鶴！はい、翔鶴姉！（一人二役 CV：野水伊織）

こちらそこ！笑うところじゃない！艦娘のCVは基本兼任が前提なんだよ。あやねるを見る！あとポツチの脳内妄想力を舐めるなよ？

・・・と無駄に力説する俺を捨て置き、雪ノ下提督が始動する。さて、いざお手並み拝見といきますか？

「天龍型軽巡洋艦―番艦、天龍さん。無茶な大破進撃命令で、僚艦の龍田さんを失ったそ
うね」

「!!」

開口一番トラウマを抉られ、目を見開く世界水準の軽巡。やっぱり容赦無いわ、ゆきの
ん。

「提督に怨みがあるのでしょうか？なら私を好きにしてくれて構わないわ」

ち、ちよつと、なに言ってますかコイツ？

「でも、貴女の滾る想いを私の中に放はなつたら、話を聞いて欲しいの」

「？」

待て待て待て！この美術部鎮守府と提督には問題がある。コイツ文学少女で下手に語彙が

豊富だから、表現が微妙過ぎるんだ。これじゃ勘違い百合ゲールルートまっしぐらだろ。何なら俺の滾る想いも放ちたいま^{はな}である。ケホケホ！

「それに同性として、貴女たちが前任提督から受けた苦しみは分かっているつもりよ」

「な!?ど、同性、だと?」

驚愕する天龍。居合わせた他の艦娘たちも固唾をのんで事態を見守っている。あ、ここがブラ鎮立て直しの決め所なんですわ分かります。

「けっ!ふざけたこと抜かしやがって!どうせお前も俺たちを兵器か化け物だと思ってるんだろうが!」

激しく言い募る彼女へ、静かに言葉を返す。

「いいえ、貴女たち艦娘は繊細で美しく、崇高な使命のために命を懸けて戦っている女の子よ。だからこそ、同じ人として、女性として心を寄せているの」

「なっ・・・？」

「私はこの鎮守府を変えたい・・・いいえ、本来あるべき姿に戻りたいの。貴女たちが誇りを持つて戦える場所に」

一度言葉を切り、辺りを見渡す。フム、取り敢えず掴みは充分か。

「でも、いきなり私を信用できるわけないわよね。だから先ず、貴女たちの想いを受け止めるわ」

これもう、薄い本ルート決定だよね。ゆきのんとなったハチマンの運命点操やいかに？一粒で二度美味しいとか？私、気になります。

「私はいつでも大歓迎ウエルカムよ」

で、そろそろ画面に謎の光が走るんですね残念です。(愛知版)

「ほ、本当に良いんだな？あとでヒイヒイ喘いでも知らねえぜ？」

探るような上目遣いで天龍が吠える。

いやちよい待て。だから何する気なのです天龍さん？若干顔が赤くなってるし、なんか眼がギラついてるんですけど。はっ！そ、そうだ、鎮守府大淀の良心さんはどうした？はやくこの百合娘を止めてくれ・・・

一縷の望みをかけて振り返った先では、

「ゆ、雪×天キマシタワ〜!!愚腐腐腐・・・」

鼻血を噴き出しながら倒れ込む大淀。海老名さんかよ・・・

結局、彼女大淀さんの轟沈でその場は収まり、雪俺ノ下の提督業初日は終了したのだった。べ、別に全然残念なんかじゃないんだからね！



横須賀鎮守府 提督私室。

「ん．．．」

ゆきのんの性能を堪能．．．ゲフンゲフン、確認した俺は、ベッドの上で脱力していた。仮にも提督たる身。常在戦場、いかなる時もデイリー演習は欠かせないのだ。まあ、ガワはゆきのんでも中身がハチマンなのだから、これは致し方ない。本人にバレなきや大丈夫だろう。さてと、そろそろ総員用具収め！消灯用意！

そして乱れた着衣を整えようと、半身を起こしたその時、

「う、うそ・・・!?」

夜の静寂しじまに響く眩くらき。入り口に差す人影。つてか、それこそまさかうそだよね？ちやんと鍵かぎかけたはずだぜ？そして表情を凍りつかせて立ち尽くすのは、五航戦の甲板胸むねて言うかなんであの子、艤装ぎそう持つてるんですか？（（； ㄥ））ガクガクブルブル

確かにいつでもウエルカムとは言ったけど、よもや夜ソノの演習ブレイ中に艦娘の奇襲を受けるとは。この八幡、慢心まんしんしました。はちまんだけに・・・

「わ、私の顔に、何かついていて？」

もちろん、そんな苦し紛れの一言で輪廻りんごの零が解き放たれるはずもなく。

「やっぱり一航戦そつくりの提督なんて・・・この、変態!!」

最期に俺が見たのは、和弓を構えたツインテールの空母娘と、真つ直ぐ落ちて来る2

50kg爆弾だった。

．．．てか、着任初日でブラック鎮守府再建失敗つても、なかなかレアケースだよな．．．(泣)



「．．．」

ゆっくりと意識が浮かび上がる。心地よい気怠さを感じながら、俺はため息をついた。てか、ゆきのん提督としてブラック鎮守府に着任早々ひとりで昇天してたら瑞鶴に見られて爆撃されてまた昇天。(悦楽) 我ながらなんて夢だ。フロイトさんなら何て言うのかしらん？

「……いい加減に起きなさい、比企谷君。そろそろ最終下校時刻よ」

すぐそばで聞こえたゆきのん提督の声。

「あら、もうそんな時間なのね。起こしてくれてありがとう」

そして、ゆきのん提督の声で答える俺。ん……？

「どうしよう……ヒッキーがゆきのんになっちゃった……」

「……どうやら、改めて徹底的に更生させる必要がありそうね、一色さん」

「いえ、もはやこれは手遅れかもしれませんが、雪乃先輩」

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている、らしい。

おわり